

「コンセプトリーダーシップ」が地域を動かす —キャッチフレーズ、コンセプトの重要性—

半農半X研究所
塩見 直紀

塩見直紀（しおみ なおき）

- ・半農半X研究所／半農半Xパブリッシング
- ・半農半Xデザインスクール／concept school
- ・綾部ローカルビジネスデザイン研究所
- ・スモールビジネス女性起業塾 2017（府北部、3期目）
- ・福知山公立大学地域経営学部（2016 春から特任教員）
- ・総務省地域力創造アドバイザー



1965 年、京都府綾部市生まれ。33 歳を機に、綾部へUターン。フェリシモを経て、2000 年、「半農半X研究所」設立。「半農半X」コンセプトを 20 年前から提唱。著書は台湾、中国、韓国でも出版され、海外講演も。ライフワークは個人から市町村までのXの応援とコンセプトメイク。綾部ローカルビジネスデザイン研究所、京都府北部対象「スモールビジネス女性起業塾」代表。福知山公立大学地域経営学部特任准教授、総務省地域力創造アドバイザー。

青山 本日は半農半X研究所の塩見直紀氏にお越しいただきました。塩見さんのお名前をご存知なくても「半農半X」ということばはあちらこちらでお聞きになっていると思います。国政にも半〇〇、半xxといったことばが使われるようになっていますが、そのコンセプトを作られたのが塩見さんです。

本日のタイトルの「コンセプトリーダーシップ」ですが、人間がぐいぐいと引っ張るだけでなくことばが先導して地域を動かす事もあります。ことばだけでなくいろんな事を実践されている塩見さんから多彩なお話をお聴きしたいと思います。塩見さんは皆さんと同じプログラムの昨年度の修了生で、当初は講演会の講師を「私なんて…」と躊躇されていたのですが、「修了されたので大手を振ってお越しく下さい」とお願いしました。

■はじめに

塩見 皆さん、こんにちは、塩見と申します。昨年、私が修士論文を提出した日は大雪で「郵送OK」の特別措置が取られましたが、私は綾部に住んでいて高速道路も危険な状態だったのでもし郵送がOKでなければ歩くしかない悲惨な状況でした。今日は1年ぶりの龍谷大学ですが、口頭試問もボロボロだったので実はトラウマをもっていて…。しかし、一番好きな青山先生からお声を掛けていただいたので来させていただきました。

私は自分自身にリーダーシップはないと思っていますが、6年ほど前に兵庫県養父市の職員の方からリーダーシップについて問われ「コンセプトによるリーダーシップがあるのでは？」と考え、「コンセプトリーダーシップ」ということばをつくりました。既存

のことばでは限界があり、中国4000年の歴史を誇る漢字でも新語が誕生する中、私は漢字の造語能力に関心があります。江戸から明治、大正にかけて美術も芸も自然も哲学もいろんなことばが翻訳され、そういったことばを除くと中国人は何も喋れないという話もありますし、ノーベル賞に影響しているとも言われています。この後お話しますが、私は漢字でつくりそのまま中国に伝わるコンセプトのことばを研究中です。

■「半農半X」誕生のきっかけ

「半農半X」誕生の背景は大きく2つあり、その一つが環境問題です。

私は平成元年に大学を卒業、神戸の(株)フェリシモに10年間お世話になったんですが、「半農半X」誕生のきっかけはフェリシモで鍛えていただいたからだと思います。就活では綾部市役所や父が教員だったので教員試験も受けたんですが、もしどちらかにいっていたら半農半Xは誕生せず、皆さんともお会いしていませんでした。

フェリシモでは環境問題に取り組み多大な影響を受けました。「持続可能な生き方、働き方、暮らし方」という事で生き方も働き方も暮らし方も変える必要がある。あれから30年間考えてきた事が時代にビシッと合い、講演会等と呼んでいただく機会が増えています。

もう一つの背景は「どう生きるか?」です。大学時代は何も考えずに伊勢で暮らしていましたが、大学進学時は同志社の神学部か高野山大学へと考えていました。龍谷大学にお世話になれば良かったのかもしれませんが、私が選んだのはアニミズム、神道だったので伊勢の大学で4年間を過ごしフェリシモに入

社し「どう生きるか?」という問題に直面しました。

フェリシモでは同期生や先輩に京都市立芸大や京都造形芸術大学など芸大生が多く、彼らからアイデアが湧き出るのは筆箱からして違うからだと感じました。彼らの筆箱にはカラーペンがたくさん入っていてアイデアをかく時も罫線が邪魔なノートではなくスケッチブックに自由にマインドマップを描いていました。それを見た時に創造性が重要だと感じ、自分が何を思っているのか、Xは何なのか、ミッションは何か、得意な事は何かを探るようになりました。しかし、探ってはみても急に天から降ってきたり地から湧き出てきたりせず、自分が何も持っていない事を知りましたが、天から与えられたXがあるのではとXの文字を入れました。もし私が自信満々の人間だったらXではなく半農半○と○には何かしらの英語やことばを入れたと思います。しかし、Xと入れた事で各々が個人で完成させられるコンセプトになった。現代用語で言えば二次利用です。今はアニメでも何でも二次利用ができなければ広がらない時代で、例えば食べるラー油がヒットしたのはアレンジしやすかったからで半農半Xも様々なアレンジをしています。最近、山梨学院大の先生が半議員半Xということばを書いておられ、議員だけでは大変なので農業を兼業する方も多く、ダブルX型もあると考えています。ドラッカーもパラレルキャリアも随分前から使われていることばですから。

■ことばで世界をデザインする

私は「ことばで世界をデザインする」を目指しています。詩(ポエム)を書いた事はあ

りませんしこれから書く事もないと思いますが、「ことばの力」を信じたいですし、ことばを取り戻していきたいと思っています。

出典が明らかではないので本当はダメなんです。「明確なことばでないでクルーが遭難してしまう」ということばがあります。皆さんは仕事でクルーを遭難させた事はありませんか？今は時代が変わり朝言った事を夕方変えても大丈夫ですが、私は1,000字より100字、100字よりも10字、10字よりも1字のことばが良いと考えています。長編も良いですが短いことばでの表現が好きで、そう考えると「仁」は究極のことばだと思います。

皆さんはコンセプトを学びに来られてはいないと思いますが、「コンセプトとは？」と尋ねられたら「進むべき方向を直感できることば」が仮の定義で良いと思います。アメリカの社会学者は「コンセプトはサーチライトである。古いサーチライトで裏側は照らせないけれど、新しいサーチライトを開発すれば裏側まで光が届く」と言っています。その事例としてある学者はジェンダーも優れたコンセプトとして挙げていますが、私はいろんなコンセプトに関心をもっています。見たままや現在の世界と変化があまりない、現在よりも退化している等々は良いコンセプトとは言えないと思っていますが、「進むべき方向が直感できることば」が好きで、そういうことばをつくっていきたいと考えています。

■大切なことばとの出会い

ソフトパワーという観点や地方をどうすれば良いかを考えると創造人材の必要性が挙げられます。一つの事も良いですが、組み

合わせ（パラレルキャリア）の時代であり、働き方改革とQOL、そして人生100年時代だとも。今年の年賀状には「人生100年時代（ワーク&ライフシフト）の流れを半農半Xからも感じます」と記しました。山崎充氏は著書の『縮充する日本』で「日本は縮小ではなく縮充では？」とおっしゃっていて、そういった人口減少、縮充時代という観点もありますし、中国で半農半Xの講演をするとローカル&グローバルをすごく実感します。

私の好きなことばに「イギリスの優れているところは、新しく始まった先端現象を世界の誰よりも早くコンセプトにまとめて世界に売っているところだ」があります。イギリスはそんな国で、日本は良いところまでいつているけれどそこにはたどり着けていない。私は「社会起業家」ということばを日本に広めた町田洋次氏にとっても刺激を受けていて、日本発のコンセプトを世界に届けたいと思っています。日本で2000年に出版された『社会企業家―「よい社会」をつくる人たち／PHP新書』にも大変影響を受けました。ある学者は社会起業ということばが中国に入ったのは2006年だとおっしゃっていますが、台湾で講演会をした帰りの電車で聴講者の中国人と2時間余り片言の英語で話したんですが、彼も同じ本を読んでいて社会起業家として目指している事も同じで同時代性を感じ



しました。

私が 26 歳の頃、1992 年ブラジル・リオで地球サミットが行われた際に出版された書籍で「ソーシャルデザイン」ということばに出会い、自分のやりたい事がソーシャルデザインだと認識しました。「新概念創出能力が重要になる」ということばも書籍から見つけ、その後 30 年余り大事にしています。半農半 X は、地方でのんびり暮らすというよりも攻撃的な面があり、それはソーシャルデザインを人知れずやっていこうという事でもあります。

■新たなチャレンジ

どこの大学にいけばコンセプトの研究ができるか、ことばの先生でもある龍谷・村田先生に「どこが良いですか？」とお聞きした事もあります。言語学ではない、経営にあるかもしれないけれどビジネスに偏っている可能性もある、もう少し関東が近ければ慶応の SFC が一番近いとも思いましたが、「コンセプトについて一番考えてきたのは芸大」と、現在は京都市立芸大の博士課程で学んでいます。これまで学んだ事に芸術的な要素を取り入れるとさらに新しい展開に繋がると、現在 52 歳で 3 回目の人生だと考えていますが、コンセプトを研究したいという思いの中、青山先生から「講演の軸はコンセプトリーダーシップで」と言っていただきました。

コンセプトメイクやコンセプトの広がり、伝播等々、明治大・齋藤孝氏が世界のコンセプト 50 を紹介した『世界の見方が変わる 50 の概念』はとてもおもしろい本です。コンセプトの提唱方もいろいろとあり、プロシューマーや福祉系のプロダクティブエイジング、国家コンセプトや都道府県・市町村のコンセプ

トもあります。高野山であれば宗教都市、綾部は田園都市として展開していますが日本中が田園都市なので意味がないかなと思っていますが、生き方のコンセプト、起業コンセプト、漢字コンセプトなども研究しています。

■ 1000 年コンセプト

哲学者の内山節氏は「長くもっているものに対する再評価が必要」とおっしゃっていますが、1000 年もつコンセプトはすごいと思っています。「晴耕雨読」もすごいことばでこれからも続くと思いますし、韓国の方は「昼耕夜読という考え方もあります」とおっしゃいました。日本の古い書籍にある「夏田冬蔵」の「夏は田んぼで冬は酒蔵」というコンセプトも日本的で素晴らしいと思います。誕生して 20 年の半農半 X も 100 年はもつと思っていますが、最大のライバル・試練は気候変動と人間が変われるかどうかです。

半農半 X は半農半漁ということばから始まり、武士も暇な時は半農半士で長野や北海道など心ある半農半医の地域医療も多くあります。島崎藤村は小説『嵐』で半農半画家ということばを使っています。また、私の子どもが解いていた国語の通信添削の例題に『嵐』が使われていて「半農半画家ということばがあるよ」と教わりました。大正時代、おそらく日本中に充満していた生き辛さを敏感にキャッチして半農半画家ということばが生まれ、その意味を問いながらどう生命を維持していくかだったのではと考えています。また、宮沢賢治も半農半工ということばをつかっていますし、私の父は半農半教員で屋久島在住の作家・星川淳氏が半農半著とおっしゃった事から半農半 X ということば

が生まれました。私の妻は「著をXに変えただけじゃない」と言いますが、これを伝える事が私のライフワークになってきました。

■私と半農半X

半農半Xは20年前に誕生しましたが、龍谷大学の修士コースに1年間行かせていただき発見した事もあり現在も進化中です。

先日豊岡市で講演会をさせていただいた際に神戸新聞社の西但馬総局長から「かつて私は『半農半X』を都会人の“生き直し”の羅針盤と表しましたが、但馬に赴任してからは“地元再生ツール”として使えると感じています。兼業農家では意識できなかった事が新しいことばによって人生の質まで変えるような力をいただいています」と言っていました。

私は1965年生まれの52歳で若い世代を応援する世代になりました。総務省の地域力創造アドバイザーをさせていただき、地方や田舎にも出版社が必要だと考えています。「文化の香りのない所に若者は惹かれない」とも言われ長野県の小布施にも文屋があるように、これからは本をテーマにした町づくりをしたいと考えています。現在は京都市立芸術大学大学院（美術学研究科）に通い、週3日は福知山公立大学に勤務し学生と勉強しています。

■4つのスクールを開講

現在、コンセプトスクール（通信教育、50週50問）、半農半Xデザインスクール（一泊二日@綾部、東京）、綾部ローカルビジネスデザインスクール（公益財団法人トヨタ財団助成）、スモールビジネス女性起業塾（京

都府北部地域対象）と4つのスクールを開講しています。

私のイチオシはコンセプトスクールで、最初は座学で約3時間コンセプトをつくる授業を京都市内でやっていましたが、東京在住の方が京都まで来るのは大変なので通信教育でできないかと考え、金曜日の夕方にメールで問題を送り月曜の朝8時までにアイデアを3つ返信するというシステムで50週続けています。私のノックを50本受けていただくもので、中国や台湾の講演会でこの話をしたところ受講したいという声をたくさんいただきました。中国版や英語版をつくれれば世界中で受講していただける可能性があり、収入面の話ではなく新しい学校も関心領域ですし、コンセプトをつくる事ができれば将来食べていけると思っています。小説も書ける人口知能ならコンセプトをつくれる可能性もあると思いますが、普段のインプットがとても重要です。地方で若年女性が減少している問題がありますが、若年女性が元気に仕事をつくっていける、地域資源を生業にできる事をさせていただいています。今日はワークシートを持ってきましたので、町づくりのプロの皆さんでトライしてみてください。

■地方が故の悩み

私は生まれ育った綾部に住んでいますが、地方の悩みとして学ぶきっかけの少なさが挙げられます。東京はもちろん京都でも様々な勉強会がありますが、地方は勉強会や講演会が少ないので「良い町には良い勉強会がある」ということばを掲げ、学びの場をつくろうとしています。

こちらは私の自宅付近の写真です。この三角屋根は明治10年代に建てられた立派な家

で、わが家はこの隣にあります。緑に包まれた里山で生まれ育ち、同級生が 10 名、全校生徒が 60 名という小さな学校でしたが、人数ではなく良い教育をしていただいた実感がありますし、自然を先生に創造性を磨いたと思っています。私は農作業をする時も胸ポケットに紙と鉛筆を入れて閃きを必ずキャッチし持ち帰って企画書や SNS にしています。大地からの乖離という問題がありますが「天・地・人」が直列にいる事はとても重要です。

こちらは私の田んぼの写真です。ここを小さな区画にして 1000 本プロジェクトとして都会から農作業をしに来ていただき、農の大変さを伝えています。1000 本プロジェクトは 1000 株を 8×10 メートルの小さな一区画に植え、約 60 キロのお米を収穫するチャレンジです。岐阜や新潟で「真似をしても良いですか？」という方が現れましたが、真似される事も非常に重要だと思っています。

今年も台風がやってくると思いますが、今の世界は台風前の海に漂う小船のようです。北極星も灯台の灯りも見えない、羅針盤があれば良いけれど壊れているもしくは海に落としてしまったような時代。そんな時代をどう生きるのか。それがこの 30 年のテーマで半農半 X が誕生した所以です。

また、私の 20 代の二大問題は環境問題と天職問題でしたが、この中にいらっしゃる 20 代の方には今を大切に生きていただきたいと思っています。どう生きるか、どう暮らすか、どう働くかをメインテーマに 5 年間様々な講演会を聴いたりワークショップに参加したりしましたが、その対話の中で生まれたのが半農半 X でした。

■半農半 X とは？

半農半 X は持続可能な農ある小さな暮らしをベースに、少ない環境負荷で食料生産の一部を担い、農地・風景・地域を守り、人と人・人と自然・人と自分自身などの関係性を回復・修復する。と同時に、得意な分野で創造性を発揮して価値を創出し、ソーシャルデザインで問題を解決し社会に貢献する生き方ですが、「関係性の回復・修復」というキーワードはあらゆる問題の核心だと思っています。半農半 X に面積は関係なくベランダでも OKなのは、東京の人を見捨てないという考え方で、東京の方が圧倒的に多く東京が故郷の方もおられるからです。随分前ですが、都市と農村の対立の話を聞いた時に大変驚き影響を受けました。都会の人は「田舎のヤツは」、田舎の人は「都会のヤツは」とお互いに嗤い合い、100 年ほど前の産業革命の頃の都市でも農村でも OK という考え方で誰かを排除するものではないのが半農半 X の特徴の一つです。時間も長くても短くても OK で、長ければ良いという人がたまにいますが、短くてもすごい人はすごいかもしれません。どちらがどうではなく、本人次第。フルタイムが偉いという考え方もありますがボランティアも尊いですし、企業でもエンジニアでも公務員でも、X がない人は周囲のサポートをすれば良いと考えています。

時々「X は 1 つですか？」という質問を受けますが、今はやりたい事がたくさんある時代ですから 1 つでもたくさんでも良いですし、さらに敷居をすごく下げました。農業はそもそも敷居が高いと思われているので、そこを如何に下げるか。心理学の本で「人間はできない理由を言う天才だ」という文によく

出会いますが、「半農半Xはどうですか？」と言った時に「子育て中なのでできません…」というお答えに対して、「1分だけどうですか？」という話にもっていくために、敷居をぐんと下げ躓かないよう緩くしています。

■アジアから世界へ

おかげさまで『半農半Xという生き方』は、台湾版（2006年）、中国版（2014年）、韓国版（2015年）を出版しています。初めて中国からメールをいただいたのが2010年頃で「今、中国人は半農半Xを求めています」というメールには驚きましたが、大変嬉しかったです。半農半Xのレポートがタイの雑誌に掲載され「やりたい」というメールをいただきましたし、有名な枝廣純子氏が英語で世界に発信された後は世界から反応がありました。現在の私の課題は半農半Xを英語でどう言うかで、もしきちんと伝えられることばが見つければさらに世界に広げられますが、決められずにいます。皆さんのご意見はいかがでしょうか？ また最近、イギリスのシューマッハカレッジに通う日本人の方から「半農半Xの論文を書きたい」とメールをいただいたんですが、半農半Xの英語版も早く出版したいと思っています。

私は出版社に売り込んだ事はないんですが、日経新聞の正月特集で半農半Xが大きく取り上げられ、ソニーマガジンズから「半農半Xを書籍にしましょう」とメールをいただきました。メールアドレスをどこかで調べられたようで、どこに住んでいようが世界からオファーがくる時代だと改めて感じました。農業の本なら農文協（社団法人農山漁村文化協会）から出版した方が良いですし他

にも家の光協会などがありますが、ソニーマガジンズはエンターテインメント系の出版社なので最初は躊躇しました。半農半Xは知る人ぞ知るブランドと言えブランドなので、そういった意味ではとても大事な宝物です。「これはみんなのコンセプトだ」と宣言していますが、変なテレビに出て「ケチだからやっている」と思われても困ります。

ソニーマガジンズから出版していただいて良かったのは、都会の若者に強い出版社で若い人に向けられた装丁で、無名の筆者ながら都会の書店で平積みにしていただいたので発売直後から「本を読みました」とメールや手紙が届きました。私は本の力はまだまだあると思っていて「本のまち八戸（八戸市）」のような取り組みにとっても関心がありますし、この本を出版させていただき人生が変わりました。編集者が半農半Xの可能性を感じてくださったんですが、これは「ことばの力」でもあります。日本で働く台湾の女性が大阪の書店で本書に出会い台湾の出版社に持ち込んでくださり、もちろん私が頼んだ訳ではありませんが台湾版が出版されたんですが、一番嬉しかったのは半農半Xのタイトルがそのまま使われた事でした。フェリシモに勤務していた時にも中国人スタッフから「半農半Xは中国でも通じますよ」と聞いてはいましたが、翻訳されると違うことばになる事もあるのでやはり漢字文化圏はすごいと思いました。

こちらは台湾版の写真で副題の「従順自然・実践天賦」は、自然に従順で与えられた天賦の才能を実践すると漢字8文字で人類の方向性を見事に表現していて、すごく良い副題を付けていただきました。アジアは自然に寄り添う生き方をしてきましたが、いつの間にか自然を支配し自然を下に見る発想にな

ってしまったと感じています。台湾も移住ブームで花蓮に移住された方が本を出版されるなど日本と同じような事が起こっていて、台湾でも講演をさせていただきました。

こちらは中国版の写真で帯に「環境問題×食品安全」とあり、水も空気も汚染され危ない中で心の問題もあるのでしょうか、水面下で1億人がキリスト教を求めていると言われている。私は龍谷大学で学んだ1年間でやりたかったテーマが「中国と半農半X」でしたが、1年では無理だとテーマが徐々に変わっていききました。なぜ中国なのかをまず説明しなければなりません、東アジアの3国の中で比較するなら分かるなどがありました。中国が半農半Xと一番相性が良く親和性があると思っていて、現在トヨタ財団に研究助成の申請をしていて間もなく結果が出ますが、半農半Xについて中国ともっと対話したいと思っています。

こちらの写真は半農半Xの本を読んだ中国人の方が綾部に来てくださった時のものです。この方も事業をされていて、「新たに市民農園を開設しました。儲かりませんが子育て世代に安心な野菜を作ってもらえたら」とおっしゃっていました。京セラの稲盛和夫氏の「心の経営をしなければ事業は失敗する」という路線の書籍が150～200万部も売れているそうですが、そういう意味で中国の

読者は近いと感じています。先ほどの写真の中国人の方は綾部の後は四国八十八ヶ所に行かれるとおっしゃっていました。

次の写真はつい1ヶ月前ですが中国の海南島を訪れた時のものです。ベトナムに近く900万人が住む九州ほどの大きな島で「美しい農村を守り、どう発展させていくか？」というシンポジウムで巨大スクリーンの前でお話をさせていただきました。いろんなランキングの高い経営者の方々とお話をする中で、「半農半Xをどうしましょう?」「私に投資ではなく中国で半農半Xをされている方に投資します」といった事を言うていただきました。3年前くらいのその席にいらっしゃった方が「本が出版された頃は敏感な方が読んでいたけれど、今はタイミングとしてドンピシャです」と話していました。中国に詳しいある方は「日本で流行った事は5年後上海で流行る」、またある先生は「東大生が考える事と北京大生が考える事が似てきた」とおっしゃっていました。続いての写真は韓国版です。

■国内での広がり

日本国内の動きですが、島根県では半農半Xが政策化されシンポジウムにお招きいただきましたし、その他にも関心をもっていたいる都道府県があります。北海道庁からも連絡をいただいたんですが、北海道も集落をどうするのかという問題があり、2年前にお招きいただいたシンポジウムでは大きな農業だけでなく半農半X的な人も農業の担い手として位置付けざるを得ない状況だとお聞きしました。日本中がそうですが、農業の多様な担い手が大きなテーマで、いろんなところが半農半Xということばをホームペ



ージ等々で使うようになりました。

■「半農半X」読者の特徴

読者は20、30、40代と子育て世代の方が多く、それによって村の担い手が増え賑わいます。小農志向で集落営農も良いんですが、良い農地を優先的にした方が良いですし、使いにくい農地を守る一面もあります。価値観を共有したい方、環境意識や暮らしを丁寧にしたい意識をもった方、さらに創造性を発揮したい方、手に職（X）をもった方、仕事がつくれる方などが読者には多くいらっしゃいます。

田舎暮らしと半農半Xの違いをよく尋ねられますが、自分のために田舎で暮らしたい人は結構いて一軒だけポツンと離れた所に住みたいなどの希望が多くあるそうです。しかし、それでは孤立してしまうので「集落に入るようアドバイスをします」と言っておられました。

「X」は2本の棒がクロスしていると私は思っていて、その交わり、関係性がとても重要だと考えていますが、これらが半農半Xを求める人の特徴です。

■「半農半X」誕生から20年

「半農半X」ということばが誕生して20年になります。このことばは私がこれからの人生をどう生きるべきか悩み生まれたもので、誰かへのことばでも愛する奥さんへのプレゼントでもなく、自分自身のためのことばでした。最初はライフスタイル論として捉えられる事も多く、Amazonで「ライフスタイル論ランキング〇位」といった事もありましたが、今は完全に政策の領域に入っています。

深尾先生もそうでらっしゃるように、最初は個人からスタートし周りが見えるようになり一定領域を超えると行政が支援すると、半農半Xも同様の流れだったと思います。ちょうど田園都市論が出た頃、私が龍谷大学にお世話になりたいと思ったのは都市での働き辛さや生き辛さでした。煙がもうもうと上がる劣悪な環境で暮らしていると出てくるいろんなものが世界を覆いつつあると感じていました。

「半農半X」のもう一つの軸は日本の農村の暮らしの生業、収入に関する事です。メガネで有名な福井県鯖江市の市長からお聞きしたんですが、メガネ作りは農閑期の副業として始めたそうです。徳川がスイスから持ち帰った北海道のクマの木彫りなど同様の事例は多いんですが、冬や端境期の収入をどうするかは農村だけでなく都会の問題でもあります。半農半Xは台湾の農村でも行われていますが、驚いた事に少数民族の方まで関心をもってくださっていて、同様の問題があると思っています。

龍谷大学に通う前は、半農半Xに普遍性があるとするれば「人は何かを食べないと死んでしまう」という生命の宿命だと考えていました。わが家の保冷庫には去年の秋に収穫した米の30キロの束がいっぱい詰まっているので、あとは味噌と塩があれば生きていけます。食べ物があれば良いのかもしれませんが、フランクフルトが言ったように生きる意味がなければなかなか辛く、この2つがクロスしています。半農半Xは20年もっていますが、100年はもつと言っている理由の一つはベーシックな背景にあると考えています。

「農業ではなく林業の“半林半X”ではダメですか？」と時々言われ、私は「ヒノキを間伐して輪切りにし油をひいたフライパン

で焼いてソースをかけて食べられるのなら林業でも良いです」とお答えするんですが、林業と農業の根本的な違いは生命維持の点です。諸説あると思いますが、古代ローマの詩人のことばに「パンとサーカス」があります。5年ほど前でしょうか、メディアにこのことばが登場し気になっていたんですが、市民に小麦粉とサーカスという見世物を与えると何も考えなくなる。日本はもちろんおそらく世界中がこの状況にあると思いますが、私は減びたくないなのでその逆をいこう、つまりパン→農、サーカス→Xだと。旅人にパンとサーカスを与えれば心を捉えられるという観光の視点もあるそうですが、とても危険だと思っています。パンとサーカスから学んだ「人はなぜ旅をするのか？」というコンセプトをこの後提示したいと思います。

■「X」がもつ意味

漢字が伝わる以前の「大和ことば」の研究から教わったんですが、野菜の種（たね）の“ね”は根っこで、稲は命の根っこと言われ根は根っこ＝根源で下向きの力だと。私はこれを大地にしっかりと立つ持続可能性、大地性だと思っています。日本人は根っこがない根無し草と言われますが、そうであれば地方創生で日本の根っこをしっかりと取り戻そうと思うわけです。また種（たね）の“た”は高く、たくさんで都会にはたくさんあるのかもしれませんが。でも、私が目指したい日本は両方を大事にする国です。上のことばをハードパワーとするとソフトパワーは上で、下が持続可能性＝サスナビリティで、この2Sが大事だと考えています。

先ほどもお話しましたが、2本がクロスする“X”の1本は自分自身で1本は社会や自然、

他者だと考えています。線路のレールは永遠に平行なので脱線しませんが、今後重要なのは関係性の回復です。スローフード運動の先駆者・島村葉津氏の書籍にも「スローフードは関係性の回復」と書いてあり、半農半Xも関係性の回復なのでこのことばを意識するようになりました。町づくりも関係性の回復が重要で、私は「自己紹介が増える町づくり」を目指したいなと。町の設計も直線よりクロスで「ベンチがある」などといった点が重要だと改めて思っていて、持続可能でありながら魅力を高め続ける事だと。地方はもちろん、世界も同様のテーマでまとめられると思っています。

■半農半X最大の意味

半農半Xの最大の意味は耕作放棄地の解消といったレベルではなく「方向性の提示」だと考えています。「この方向にいけばいい」とし、「絶対にOK!」といった危険な言い方はせず、おおよそ、だいたいということばを使います。

また、国民皆農ということばがあります。以前、NHKのお正月番組で女性解説委員が21世紀のキーワードとして半農半Xと挙げてくださったんですが、「国民皆農」と言っでしまいゲストから「やりたいけれどできない」と言われていました。私ならそうは言わないと思いましたし、当時小学生だった娘が「勉強不足だね」と言っていました。娘は現在明治大学の小田切徳美先生のゼミで鍛えていただいているんですが、綾部に帰って来てくれたら良いなと思っています。

■コンセプトメイクの力

私は20代から「新概念創出能力」を意識していて、アイデアをつくる力、ビジョンをつくる力、コンセプトメイクの力をつけていきたいと思っていました。大事にしている感受性や感性の参考資料もお配りしましたが、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」は50年ほど前のことばで「自然の神秘さ不思議さに目を見張る感性」は最も重要だと考えています。

そして、ことばの力。私は大学4年生の頃からことば貯金をしてきましたが、書き留めてきたいろんなことばが現在満期を迎え、そこからオリジナルコンセプトをつくっています。私の方程式、法則は間違っているかもしれませんが、今は修練というか、まとめるような感じというものをできるだけつくるようにしています。

さらに新しい組み合わせを意識しています。世界を変える魔法はなかなかない中、可能性があるのは組み合わせだと京都府の山田知事が農福連携を始めていますが、私も委員として入らせていただいています。農業×福祉を始め様々なものを組み合わせるのはおもしろいと思います。

芸大出身の先輩や同期生と出会いいろんな本を読む中で、ジェームス・W・ヤング氏の著書『アイデアのつくり方』の「アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない」ということばに出会い、「なるほど!!」と思いました。半農半Xもここから始まり、技術革新は誤訳と言われているイノベーションを改め、新結合（ニューコネクション）をつくりたいと考えています。

■半農半社会企業家を目指す

茨城県にある東京藝大の取手キャンパスでは、取手アートプロジェクトとして半農半芸をやってらっしゃいます。3.11の時もドイツでは既に半農半電の町があったと紹介されていましたが、福島や千葉など日照量の多い所はこういった生き方もあります。半公半Xや半林半Xは自伐型林業と観光を合わせる試みで、高知や岡山で行われています。また、徳島県・美波のIT会社が半X半ITの社員を募集したところ良い人材がたくさん集まりました。これまでIT企業というどうしても1万社、10万社の中の1社というレベルだったそうですが、徳島県知事は「徳島は半X半ICTの町」とおっしゃっているそうです。

このように半農半Xはいろんな所で使っていただき広がっていますが、私は半農半社会企業家を目指していて、ビジネス商法で社会の問題を解決したいなど。社会企業家というコンセプトと半農半Xのコンセプトを合わせて半農半社会企業家でいきたいと考えています。

■今後の課題

AI（人口知能）時代をどう生きるかを私なりに考え、自然と生まれたことばに「ひとりAI」があります。例えば柳田國男を読み隣のおばあちゃんから知恵をいただく。何でもかんでもインターネットではなく、自分の中にいろんな情報を入れ自分にしかできないアウトプットをする。そのためにはひとりAIのような考え方もあるのではと。

私はコンセプトがつかれるなら生涯食べ

ていけると考えていますが、目的は食べていく事より時代を切り開くソーシャルデザインです。では、誰でもコンセプトをつくる事ができるのか。ことばが嫌いな人もいるのでどのようにすればコンセプトがつくれるのかが一つの課題です。

先ほどお話した通信教育版のコンセプトスクールは、毎週金曜日にメールで課題を出し月曜の朝をメ切として 50 週連続で出題します。受講料は 1 万 5,000 円ですから 1 問 300 円で、「安すぎる!」という声もたくさんいただいています。私が各々にコメントするので基本褒めます。このスクールをやって分かったのは、コンセプトづくりを練習すると自分が分かり自分の好きな事が分かり自分の得意な事が見えてくるので一石二鳥だと思っています。台湾や中国でも受講は可能なので、手動でクリックしなくても自動できたら良いと考えています。この通信教育は半農半 X の読者にひきこもりの方がおられ「綾部で行われているワークショップに行きたいけれど恥ずかしくて行けません…」というメールをいただき、在宅で応援できるシステムとして始めました。約 1 年・50 週続けていただく事でことばへの感受性が高まります。

こちらがコンセプトスクールの課題の用紙です。ハガキサイズに印刷して庭の葉っぱの上に置いて写真を撮るといった手法で、今までパワーポイントは使わずやってきました。今日お配りした資料の中に課題用紙がありますが、「あなたならどんな『〇〇甲子園（高校生のための全国選手権）』を企画しますか?」が初回の課題です。例題の「観光甲子園」は神戸の大学が始めたもので、写真甲子園は有名な北海道・東川町で俳句甲子園は松山で行われています。私はこのことば

に出会ってから「自分ならどんな甲子園をやるか」と考え、この企画は町づくりにも使えるので綾部では「平和甲子園」を提案しています。日本中の高校生にどうしたら平和になるかのアイデアを競っていただくもので、具体的部門と思想部門の 2 部門があります。思想部門は「エスペラント語をつくる」といった発想をした高校生がいまいかなど、高校生のアイデアに私たちが応えられるかを検討中です。

せっかくなので「〇〇甲子園」の課題を皆さんにやっていただきます。皆さんの町を中心に高校生のための選手権を考えてください。高校生が本気で勝負するようなアイデアが出た場合は 10 億円規模の選手権になりますし、スポンサーを集めれば実現可能なアイデアが出る場合もあります。アイデアは各自できちんとガードしていただき、今日聞いたアイデアは横取りしないでください。基本は「自分がやりたい甲子園をやる」で、「味噌汁甲子園」「焚き火甲子園」など、焚き火は分厚い本も出版されている美学があります。

福知山では「田舎力甲子園」が行われていて、おもしろい高校生やすごい高校生がいるもんだなと感心していますが、人間の創造性開発はまだまだだと思いますし学校教育はもっと変わる必要があります。古い考え方もしれませんが、兵隊と工場の学校がありましたけどもっと違う未来があると思うわけです。子育て中のお母さんは大変ですが、10 分でも自分の時間を使っていただき実感が湧けばいいと思いますし、コンセプトブックを一冊の本にすればどうかとも考えています。

京大の木谷哲夫先生の『成功はすべてコン

セプトから始まる』という素晴らしい書籍に「良いコンセプトの第一条件は、ワクワクする可能性、大きなインパクトをもたらす可能性があるという事です。『難しいかもしれないが、ひょっとするとうまくいく。もしうまくいくとすごい事になるぞ』というのが最高のコンセプトです」とあります。そこで「平和甲子園」なんですがいかがでしょうか？私の中では良いコンセプトの第一条件を感じているのですが。

また、任天堂のWii（ウィー）を開発された玉樹真一郎氏が『コンセプトのつくりかた』を出版されています。現在は八戸に帰っていますが、「コンセプトとは複数のビジョンが抱える複数の問題を同時に解決してしまう魔法のようなもの」と書かれていて、半農半Xも複数の問題を解決する可能性があると思っています。良いコンセプトは将来が明るいものとなり、悪いコンセプトは今と変わらない、今より悪くなるものという表現をされている方もいらっしゃいました。（株）電通の山田壮夫氏は書籍『コンセプトのつくり方』で「そもそも私たちはコンセプト（概念）がなければ、何ごとも見える事はできず、コンセプトは経験的世界というか暗闇から物事を照らし出す“サーチライト”で、イノベーションとは、サーチライトの照らし直しである。コンセプトは直感的に進むべき方向を共有できることばとして表現される」と書かれています。アメリカの社会学者タルコット・パーソンズは「コンセプトはサーチライト」と言っていますし、ジェンダーということばも見えるようになりました。先の玉樹氏は「最終的に生み出すコンセプトが次の3つを満たしている事。覚えやすい（簡単に覚えられ、いつでもどこでも思い出せる事）、伝わりやすい（人々の間で流通しやすい事）、

変わらない（数多くのコミュニケーションを通して、形が変わらない事）」とも書かれています。半農半Xは、半農半〇ということばがあるのですがすぐに思い出せますが、私は3つ目の「変わらない」がすごく好きで、どんどん変わっていく事もありますが人を通して変わらない事が大切だと。半農半Xも一人歩きしているのでいろんな捉われ方や使われ方がありますが、基本は見た瞬間分かると思います。

■塩見直紀が選ぶグッドコンセプト

私が選ぶグッドコンセプトは先ほどお話しした「晴耕雨読」、そして「身土不二」で、これらは本当に素晴らしいコンセプトです。「身土不二」は身体と生まれた土地は一つであり、これが乖離し取り戻そうとしているのが現代だと思います。「地産地消」も半農半Xと同じ頃に日本で誕生したことばですが、現在は台湾でも使われています。町づくり系の注目コンセプトは、頑固なデザイナーの梅原真氏が高知・黒潮町につくられた砂浜美術館で、「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」と謳っていらっしゃいます。私も行かせていただいたんですが、ウミガメが来たり流木が流れてきたりする砂浜はもちろん、デート中のカップルや夕日



などすべてがアート作品というコンセプトで、こういった考え方は1000年もつとっているので「1000年コンセプト」と呼んでいます。

アルビン・トフラーが30年ほど前の著書『第三の波』で示した概念「プロシューマー」は、コンシューマー（消費者）とプロデューサー（生産者）を組み合わせた造語で、手作り市などに行くとたくさんのプロシューマーがいる事が分かります。最近は完成品よりも道具が欲しいという人が多いそうです。また、同じ頃に増田米二氏という未来学者がいろんな機会と出会い自分を開発し成長する人を「機会開発者」と名付けました。これはプロシューマーと同じ頃に出たんですが、どちらが早かったのか現在研究中です。さらに1990年頃、クリントン大統領時代の労働長官ロバート・B・ライシュ氏が「シンボリック・アナリスト」ということばを示し、「シンボルを操る人の時代が来る」という書籍を出され、私も大変影響を受けました。その他にもリチャード・フロリダ氏の「クリエイティブ・クラス」といったことばがあります。

これらの中に半農半Xを並べて分類してみると、農村発のコンセプトが少ない事が見えてきました。「地方で腹話術をマスターした人が社会貢献した場合も機会開発者だ」とありますが、基本は都会発のものが多く、私は英語で言うER＝デザイナーやST＝スタイリストなど人を表すことばにも関心をもって、半農半Xもこの辺りに位置付けられると思っています。

漢字コンセプトの例としては西郷隆盛の「敬天愛人」で、京セラの稲盛氏や韓国の大統領にもこのことばが好きな方がいらっしゃいます。由来を調べると、中国の皇帝のことばだとか、愛という概念はキリスト教の影

響ではないかなどと言われています。そして夏目漱石の思想的到達点と言われ天に則りながら自分だけという考え方を捨てる「則天去私」もすごいことばだと。敬天愛人と則天去私と半農半Xの3つを並べて感じたのは、半農半Xは天を敬い天のリズムに従い人を愛し自分だけという考え方を捨てる事だと思っているので東洋的な考え方と言えます。また、漢字が持つ造語能力にも関心をもっています。

■綾部の町づくりコンセプト

綾部市の人口は約3万3,000人ですが、大学生が進学で町を出ていくため人口はコンスタントに減少しています。綾部から通学するという発想がなく複線電化が最近の事なので、通学している学生はまだまだ少ないです。私は綾部から四条烏丸まで半年間通った事があり、本はたくさん読めますが身体は辛かった記憶があります。

綾部は大本教（民衆宗教）の開教地で、キリスト教精神で綾部が発祥の地でもあるGUNZEは未だに朝礼で賛美歌を歌う愛を大事にした会社です。また合気道発祥の地でもあり世界連邦の第1号宣言都市と、コンセプトはつくりやすい町です。福知山の大学に週3日通っていますが、福知山はコンセプトづくりが難しいと感じています。

綾部の「型」は、平和と里山文化、心の町、そしてものづくり。田舎に1部上場の会社が2社あるのは珍しく、それはトライ系のものづくり集団がいらっしゃったからだと思います。1年半ほど前に1冊まるごと綾部の本『驚きの地方創生「京都・あやべスタイル」』が扶桑社から出版されました。副題が驚きで「上場企業と半農半Xが共存する魅力」とあ

り、このことばを1つで表せたらニューコンセプトがつかれると思っています。このままではちょっと長く、どちらかではなく両方ありがソーシャルインクルージョンだと思っているので、これを上手く言えることばがあればすごいコンセプトがつかれると。

私が目指す綾部の姿が「人生探求都市」で、旅する若者に生き方や未来のヒントを提供できる町。ふと入ったカフェで手に取った本にヒントがあったり、カフェのマスターが良いことばをポロツと言ってくれたり。世界でここにしかない町をつくっていききたいと、先日当選された山崎市長の耳元で2期8年、前市長の3期12年もささやいてきました。私は政治家になるつもりはありませんが、ことばの力で貢献していきたくて考えています。

京都は観光客が多くお金を落としてくれますが、ゴミも落としていきます。湯布院等の観光地では誰に来ていただくかが重要だと言っていますし、「こんな人に来て欲しい」という言い方もできます。これからの日本の方向性として、日本の知恵を旅人に提供し旅人の人生を応援するような国づくりができたなら人生探求都市ということばをつくりました。

現在綾部では本をテーマにした町づくりをしています。綾部をテーマにした小説は3作あり、大本教をテーマにした『邪宗門／芥川龍之介』、合気道をテーマにした本、GUNZE（グンゼ）をテーマにした本とどれも有名な作家が書いてくださっていて、そういった本をテーマにお土産として本が買われる町をつくりたいと考えています。福井県の丸岡町に「一筆啓上賞」という有名な賞があり、私も応募したらたまたま賞をいただいた事があります。『半農半X』を出版する前の事です、丸岡町でお土産として受賞作品

を買う観光客を見た時に「本がお土産の町ってカッコイイ」と思いました。お土産本を目指しているのは半農半Xな綾部人を88人紹介した本で、駅の観光案内所や特産館に置いてあります。旅人が読み友達に貸してまた新たな旅人がやってくる、そんなふうになればと、かなりマニアックな本ですがおもしろいと思っています。また、中国に行った際に「中国版を出版しませんか？」と提案しました。中国は省や市などが33あるので、「33巻セットはどうですか？」と提案したところ、実現しそうでした。

■コンセプトをつくる

「みんながコンセプトをつくれる時代」という願望があります。みんなが何とか食べていながら家庭を築きながら社会を変えていけたら。目指すところは持続可能でみんなが萎縮せずアイデアを出せる世の中で、地方には魅力的な仕事、魅力的な発想、魅力的な人、魅力的な場所、魅力的な学び舎が必要だと思っています。ことばで世界をデザインする事を続けていきたいですし、コンセプトによるソーシャルデザインをしていきたいなと。

綾部には196の自治会があり、もしその自治会に一人ずつ移住者が来れば…という発想で「1集落1移住者」ということばが生まれました。これを前市長に伝えたところ「そうならば開かれた町になって良いね」と言っていました。京都は芸大出身者が4,000名も誕生する町なのでこの発想を少し変え、若手のデザイナーが地方に来てくれたらもっと変わるだろうと地域興し協力隊のデザイナー版を考えました。実際に長崎県対馬市にはデザイナーが入っています。

半農半 X 研究所は私が代表で経理も担当し一人でやっているの「1 人 1 研究所」とアレンジしていますが、これは X をさらに深めるイメージです。自分のテーマを生涯探求し国や町は図書購入費等で応援するベーシックインカムの教育版があると思っています。ただ、ベーシックインカムだとそのお金がタバコにいくのでは？パチンコにいくのでは？と心配する方が多いと思いますが、私はテーマを申請すれば図書購入費が貰える仕組みになればと。研究成果は独占せずにシェアして良いものは国家プロジェクトにする。最期は PPK（ピンピンコロリ）と介護される事なく大往生が、私の目指す 1 人 1 研究所社会です。

幼稚園の時先生に「何か研究所をしましょう」と言われたら、私は幼虫が好きだったのでカブトムシ研究所やオオクワガタ研究所をやりたいと言ったと思います。小学生や中学生でも十分テーマはもっていますし、実際に仏像大好き少女やキノコ大好き少年、将棋の藤井五段のような少年もいらっします。みんなが自分のテーマを探求し、研究成果を独占しないような社会が良いと思っています。

私の観光のイメージは「天職観光」で、なぜ旅をするのかを考えると自分を変えたいという願望が大きかったりします。美味しいものを食べたい、絶景を見たいという願望ももちろんありますが、自分を変えたいという思いは昔からあり、これからは「天職のヒントを探す旅」なのではと。今は情報が溢れ情報が入れれば入るほど自分を見失う社会を散逸社会と呼び、目指すべきは何かを修練する社会＝修練社会なのではと考えています。

■綾部での試み

最後に綾部での取り組みについてお話をさせていただきます。

トヨタ財団に企画書を提出して 2 年間助成金をいただき、「ローカルビジネスデザイン研究所」と名付け、市民がもつ自分資源×地域資源で何かできないかを目指しました。

今日は地域資源の見つけ方の資料「地域のたからものー地域資源発見シート」をお配りしています。シートの中身の「自治会 地域資源メモ」の欄があいうえお順になっているのは、お年寄りもできるという想いからで、そういうツールをつくりました。綾部には 196 の自治会がありますが、その地域資源の見える化をより細かくやりたい。また、2 年間で 4 冊のミニブックを作成し販売、その売り上げを創業支援基金（ファンド）にして綾部ローカルビジネスデザインスクールや綾部ローカルビジネスデザイン研究会などを毎月開催し、コミュニティ FM でラジオ番組も行いました。

また、小・中・高校生を対象にしたアイデアコンテストや綾部の地域資源を 18 紹介しながらそこに書き込む様式で GUNZE の T シャツを使ったイベントを開催しました。私は T シャツでアートイベントをやりたくて、綾部は平和な町なので平和 T シャツ展をしたいなど。他にも綾部の“あや”にちなんだあやとり T シャツなど何かできないかと考えています。

さらに福知山版として「皆さんのまちでつくりませんか？」と提案中で、自分資源とまち資源を同時に見つけられるミニブックも作成しました。「1,000 円だとハードルが高いのでワンコイン（500 円）のワークブック型

にしてアイデアを出してもらえば元を取ったと思っていただけるかな」と考えています。そうすればワークブック専門の出版社もできます。

もう一つ、私は「A to Zが世界を変える」と考えていて、「A to Z」という手法を10年ほど研究しています。お配りした自分A to Zシリーズの私版「塩見直紀A to Z」は、日本だったら1億2,000万人のA to Zブックがつくれてすごい国になるという発想です。

また、綾部の人口は3万3,000人、福知山は8万人ですが、福知山市民をより細かく見ていこうというものです。「町の売りは人です」とシンポジウムの締めのことばにもよく使われますが、私はこのことばがあまり好きではなく、最大のメディアは人だと思っていますからもっと細かく人を見る手法としてA to Zを考えています。

公立大の取り組み「地域協働型実践教育」では学生が地域と交わっています。宝物発見能力の向上や地域資源の見える化、成果物が新しい地域資源になる事、ニューコンセプトがつくれる事などをゼミのテーマにしています。

27年の歴史を誇る福知山マラソンと篠山ABCマラソンにはあまり差がないと思いますが、東京マラソン、京都マラソン、神戸マラソン、大阪マラソンなどいろいろある中、田園型マラソンとして福知山マラソン独自の魅力をA to Zで表現しました。農村地域の綾部は観光が一番弱いですが、唯一の可能性は農家民宿だと20年前から思ってきたので、そういった点をまとめました。また、観光の魅力が少ない福知山からデザインという観点でA to Zを集めました。さらに、中世木A to Zは55軒の集落を1冊にしたもので、今、綾部の限界集落を集落毎に1冊にま

とめる取り組みを的場先生や綾部市役所と一緒にさせていただこうとしています。

サンプルでつくった私版のA to Zですが、福知山市民に「私もこんなのがつくりたい」と言っていたら嬉しいですし、イラストレーターのソフトやパッケージを公開して自由に作っていただける仕組みを考えています。また、福知山のA to Zの取り組みで京都市立芸大の博士論文を考えています。皆さんの修論は論文だったと思いますが、芸大は作品と論文でそういう時代もおもしろいなと感じていますが、私はアーティストではないのでどんな作品ができるか私なりに頑張りたいと思っています。福知山市の人口は8万人ですが、その1%のあたる市民の潜在性の見える化にチャレンジしていきたいです。

■希望はどこにあるのか？

先ほどもお話しましたが、アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何物でもありません。「アイデアは交差点から生まれる」ということばに出会い、如何にして町に交差点をつくっていくのか。大学もマンモス校になると人は多いけれど知り合いはそんなに…となりますが、知り合いづくりは重要です。

私がつくった掛け算ですが、先人知恵（リスペクトできるもの）×若い感性（インスパイアできるもの）がとても重要です。また、最近出会った足し算で「OLD + OLD = NEW」があります。古民家や発酵食品などがそうですが、東京では発酵マイスターがいて予約が取れない講座があるそうで、OLD + OLDでNEWのコンセプトをつくる事ができると思います。福武総一郎氏がお

っしやった「あるものでないものをつくる」が目標ですが、言うは簡単でなかなか難しく、しかし私が目指すのはここです。

綾部も福知山も大変ローカルですが、どこかで世界最先端の町を目指していますし、さらには地域資源が減らない事を目指しています。今夜2年任期の自治会新組長の集まりがあり、10人の組長が次の自治会長を探してくる役割があります。長老が亡くなると地域資源が減るので減らさないよう継承しつつゆっくりと育み、田舎ですが地域資源を増やす事も目指したいと思います。また、地域資源が増えるためには市民一人ひとりの自分資源が重要で、自分 A to Z もひいては町の厚み、市民の厚みを出していくためだと思っています。

■最後に

「我々は何をこの世に遺して逝こうか」。28歳の時にこのことばに出会い、大変影響を受

けました。このことばは明治27年、内村鑑三氏が33歳の時に出版された書籍『後世への最大遺物』の中にあり、箱根で講演会をされている中で「お金か、事業か、思想か」と話されたそうです。皆さんなら何を遺していかれますか？ 私はお金と事業は自信がないので、今、ようやく見えてきた思想・哲学かなと思っていますが、それは人それぞれです。

人は死ぬ時に結構後悔するそうですが、後悔のない人生を送りたいと33歳と10ヶ月でフェリシモを退社綾部に帰ってきました。私の母は42歳で他界したんですが、当時10歳だった私の20～30代のテーマは「42歳で死んでも良い人生」でした。

今は半農半Xが一人歩きし、私の名前は出なくても何かが残せて良かったと思っています。拙いお話でしたがご静聴いただき、ありがとうございました。

(2018年2月3日)